

長州戦争こぼれ話(一)

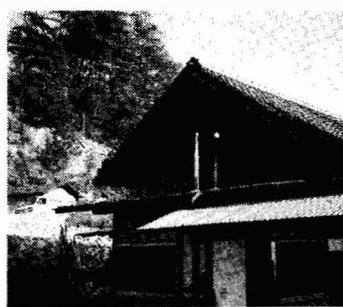
大嶋 敦子

長州戦争のことは廿日市町史に詳しく出ていますので、ここでは古老から承った話を紹介します。――()は資料より。

明石口 高野 サダエ氏

T六生

折敷畑や明石口の丘の一角が戦場になった時に、この家の倉と棟続きの駄屋の二階が怪我人の収容所になっていた。裏山から水が流れて来ているので都合がよかつたと思われる。病人は母屋に



高野家の駄屋(昭61.5)

は入らなかつた。どっちの軍か聞いていない。この駄屋は藁葺きだったので瓦にやり替えたが、建前の時の扇があつて嘉永六年(一八五三)と書かれ、柱にも嘉永六年と書いてあつた。今も当時の建物である。(一四五年前)すぐ裏が津和野街道だから津和野の殿様が寄つて休んで行かれていた。(慶応二年(一八六六)第二次長州戦争)

宮内の場 故 広藤 鼎氏 M四一生

嘉永生れの椿原のおじいさんから子供の頃聞いた話だ。おじいさんが一六、七の頃、切つた首を「あつちへ行け、こつちへ行け」と指図されて持ち歩かされて恐ろしかった。

子供の頃、御手洗川で泳いでいると鉛玉ぐらいの鉛の鉄砲玉が落ちていたので、潜って拾っては遊んでいた。

長州兵は、石灰を入れておく灰小屋へ入つていた。

(畑口で長州斥候兵二名が射殺された。)

地元で荒神塚と呼ばれ、触れると祟ると言われていたが、明石からずつと的場まであるから戦死者の首塚ではなからうか。陶合戦の時かもしれない。

宮内宮迫 故 宮本 詩朗氏 M三一生

長州兵は、米を入れた腰兵糧を腰につけて田の畦を抜刀して走つた。その米がボロボロこぼれていた。どちらの兵も若い者だつたそう。

長州は米をくれた。長州は金持ちだと評判が高かつた。(大竹方面では長州勢が井伊軍の残した米千俵を火災民に届けた。岩国和木村は米百俵三十俵を届けた)

宮内佐原田 高本 等氏 T八生

宮内の槍出・夜泣き地蔵の辺りが一番の激戦地であつた。稲の出来の大切な時期に稲田を駆け回られたのだから農民は大迷惑した。

幕軍は廿日市潮音寺で葬式をした。長州は帰らずに大野妹背の滝の大頭(おおがしら)神社で慰霊祭をした。

宮内 故 武田 敏彦氏 T六生

この裏山(竜口山・孤雲山)の墓地に長州戦争の戦死者一五・六人を埋めた土饅頭がある。中川のおじいさんが可愛そうだからと近所の人に呼びかけて担ぎあげ、葬つた所へ目印にと松を植えられたが松喰い虫で枯れた。

昭和二十四年頃、甲冑をつけた足のある幽霊が晩の八

時過ぎ家の西側軒先にじつと立っていた。きつと水が欲しかつたのだらう。専念寺へ頼んで墓の前でお経をあげて貰つたらそれから出なくなつた。(八月十三日宮内村

注進書では彦根方七人、高田方十八人の二十五名戦死その内首なし七人を取り片付けたとある)今では塚に雑木が茂り、場所不明になりかけているが盛土が高いので何とかわかる。